



## ブックレビュー

# 坂本光司・山田伸顯 編著 『中国義烏ビジネス事情 ——百均商品のふるさと——』

発行元◎同友館  
発行年月◎2008年2月  
総ページ数◎187ページ  
価 格◎1680円(税込)



### 「興商建市」義烏を解剖する

義烏が世界マーケットにデビューして久しい。しかし、その実態はなかなかつかめなかった。歌手というならば、上海や広州が本格派のスター歌手であるなら、義烏はさしずめ裏町の盛り場を流す演歌歌手であるからだ。スター歌手がその華やかさゆえに注目を浴びるのに比較し、この演歌歌手は素性も、歌唱力も、歌う癖もなかなかわからなかった。この『中国義烏ビジネス事情』の最大の成果は、このうわさの流しの演歌歌手を余すところなく解剖したことである。

本書は、①義烏のマクロ指標、全貌に迫る部分、②義烏の商品の現況とそれが市場に与える影響の部分、③それでは日本の中小企業はどうするのかの対策の部分、の3つの部分に分けられる。

100円ショップの供給都市である義烏市は、人口約70万人(このほか義烏市外から流入してきた一時滞在者が60万人)、上海から南西へ300キロ、杭州から南へ100キロの位置にあり、20年前までは無名の田舎町である。

義烏の農民はもともと働き者で、農繁期には地域の特産品である砂

糖やあめを行商する風土があった。日本でいえば富山県人に似た風土である。商人感覚のするどい義烏人は、今度は、糸、口紅、くしなどの日用品を義烏に持ち込んで売っていた。

1984年に義烏市政府は「興商建市」の構想を掲げ、市役所の近くに日用品の卸売市場「小商品城」を建設する。これが、今や卸売りを中核とする商店が8万店集積する、世界の商いの街の始まりである。

義烏市政府が整備した「小商品城」は大きなもので10カ所、なかでも福田市場(中国義烏国際貿城)は、数ある義烏市の市場の中でも最大規模で、面積は140万平方メートル、入居企業は2万3000店と破格の規模である。この福田市場では、軽工業品であれば何でも手に入る。

この義烏市政府の「小商品城」では40万アイテムが調達可能であるが、本書ではその中で自転車、かばん、眼鏡、時計など47品目を取り上げている。ここは6人の専門家が、何度も、何度も現地を調査し、ディスカッションを重ねた代物だけに圧巻である。

たとえば、眼鏡を取り上げると、1本20元から30元(320円から480円)、最小購入単位300

本、商品の機能、品質は、かなりよく、デザイン違い、色違いで品揃え豊富な製品が写真付きで紹介され、鯖江などの日本の国内産地との比較が述べられている。このような方式での紹介が47品目続いている。義烏の「小商品城」に行かなくても行った感じになる。

最後に、日本の中小企業への提案がなされている。今までの価格競争から離れ、価格、品質、デザイン、技術、研究開発、納期、スピード、小回りなどの独自のビジネスモデルを確立し、ソフト面、非価格面での優位性をセールスポイントにすべきであると具体的に述べている。

少なくとも日本の多くの中小企業は義烏を訪れ、この「小商品城」がどの程度のものなのかを見ておく必要はある。本書はそのことを教えてくれている。最後に、生産、流通、販売の機能を街づくりの中で具現化した義烏市政府の政策力にも注目したい。企業家精神を發揮しなければ、地域も、企業人も生き残れないことを本書は教えてくれている。

(法政大学 大学院 イノベーション・マネジメント研究科 客員教授 増田辰弘)